

高齢者のスポーツイベント参加 における意識と行動

○山口 泰雄 神吉 賢一 (神戸大学) 野川 春夫 菊池 秀夫
長ヶ原 誠 池田 勝 (鹿屋体育大学)

高齢者 スポーツイベント 態度 スポーツ参与 生涯スポーツ

1. はじめに

わが国の高齢者人口は、1553万人に上り、総人口の12.5%を占めるようになった(総務庁、1991)。21世紀には、4人に1人が高齢者という超高齢社会を迎えることが予測されており、かつての「うば捨て山」話に代表される”エイジズム”(高齢者への社会的差別)の再燃が懸念される。このような社会規範や老人医療費の増大に伴い、高齢者を対象にしたスポーツやレクリエーション活動の意義と役割があらためて問われている。

ゲートボールやニュースポーツの普及に伴い、高齢者を対象としたスポーツイベントが全国各地で開催されるようになってきた。高齢者のスポーツイベントは、高齢者の生活空間の制限もあり、地域社会を核にしたローカルイベントが中心であったが、1988年に開催された全国健康福祉祭ひょうご大会(ねりんピック'88)以来、生涯スポーツの全国大会が増えている。

高齢者のスポーツ参与に関する社会・心理学的研究は、時代の要請と共に増加傾向にあるが(海老原,1986;山口,1988,原田,1990)、高齢者スポーツのイベント参加に関する報告は少なく、増大しつつある高齢者スポーツのイベント運営に貢献できる応用研究が求められている。本研究は、高齢者を対象にした生涯スポーツの全国大会における参加者の意識と、イベント参加における行動を明らかにしようとする探求的な目的により着手した。

2. 研究方法

研究対象は、全国健康福祉祭第1回ひょうご大会(1988)、第2回おおいた大会(1989)、第3回びわこ大会(1990)である。研究は、フィールド調査を中心にして、以下の2つの方法により進められた。

- 1)文献調査：第1回大会から第3回大会の公式報告書および関連資料
- 2)参加者調査：第2回おおいた大会の参加者(N=177)に対して、直接面接法により質問紙調査を実施した。

高齢者スポーツの全国大会という探求的なテーマであるので、以下の研究問題(research problems)を設定し、実証的データにより検証した。

- 1)高齢者スポーツの全国大会における参加者は、イベントに対して何を求めているのだろうか？
- 2)高齢者スポーツの全国大会における参加者は、イベントにおいてどのような行動をしているのだろうか？

3 結果と考察

Fig.1は、イベント参加に対する態度を表したものである。4つの指標(勝利、ベスト、楽し

み、交流)は、Webb(1969)の専門化尺度(Professionalization Scale Toward Play)に修整を加えたものである。分析の結果、ねりんピック参加者は、試合に勝つことより、むしろ”交流”や”ベスト”、そして”楽しみ”といった側面を重視していることが示された。すなわち、勝敗という競技の「結果志向」より、試合を楽しんだり、選手同士との交流といった「プロセス志向」であるといえよう。

しかし、競技の種目別にデータ分析を行うと、態度の違いが顕著になってくる。勝利志向やベスト志向においては、ゲートボール参加者が最も強く、次いでテニス、パタンクの順であった。これは、競技人口や組織化、また大会出場の経緯による影響が強いものと考えられる。すなわち、ゲートボールのように高齢者を中心にした全国組織をもち、600万人といわれる競技人口と予選を実施している種目と、競技人口が少なく、2つの全国組織をもつ発展途上のパタンクでは、スポーツへの態度(特に勝利志向)の差異が顕著であり、Webbの「専門化が進めば勝利志向が強くなる」という仮説を実証している。

Fig.2は、ねりんピックにおける各種イベントの参加者数の推移を示している。健康関連イベント(スポーツ大会)の参加者は、大会毎に増加し、第3回大会の合計参加者数は11,824人にも上った。参加者の滞在日数は、4日間が最も多く(36.2%)、3日間(25.9%)、5日間(25.3%)の順で、平均滞在日数は4.0日間であった。大会中には、種目大会や各種イベントだけでなく、県内の観光をした者が6割以上を占めた。これらの結果から、高齢者スポーツの全国大会の参加者は、種目大会の参加だけでなく、各種の関連イベントへの参加や観光旅行といった複合的な行動形態をとっていることがうかがえる。

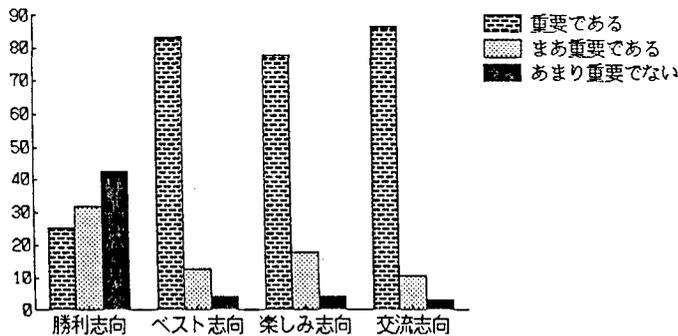


Fig.1 イベント参加に対する態度

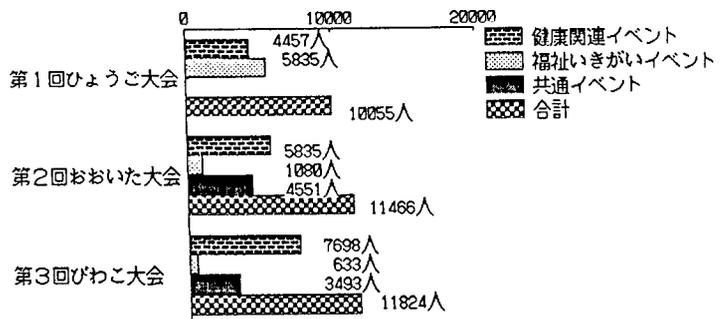


Fig.2 ねりんピック参加者数の推移